



Title	太宰治「皮膚と心」論：記号性の消失、無効化される権力
Author(s)	吉岡，真緒
Citation	太宰治スタディーズ. 2012, 4, p. 168-178
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治「皮膚と心」論——記号性の消失、無効化される権力

吉岡真緒

一、はじめに

太宰治「皮膚と心」(『文学界』昭14・11)は、いわゆる太宰の「女語り」の作品として語りの巧みさを評価されてきたものの、その巧みさの内実については、作者の資質や論者自身の女性観を根拠とする説が多かった。⁽¹⁾語りの巧みさを評価するのであれば、その語り方に言及する必要があるだろう。渥美孝子「『皮膚と心』論」(『太宰治研究5』平10・6、和泉書院)は、語り手「私」の話法に着目した論である。

渥美は語り手「私」について、実体的な「女」像や太宰の資質に還元せず、その固有性に着目する。「私」の仕方によって選び取られたのが、描かれた「女」だと言うのだ。具体的には、「ごくしやく」した夫婦関係の背景にある学歴差を捉え、この結婚を「仕合せ」と感じるためにはその「階級性」を解消すること、すなわち自分の「『頭のよさ』や『叡智』を否定」して

「私は、結局は、おろかな、頭のわるい女ですのね」とする結論づけが必要であり、「階級性」解消の欲求が「女」論への回路となると述べる。

「階級性」とは夫と「私」の差異に他ならない。それを梶子に語りの志向の変化を捉えたのが梶原理智「『皮膚と心』」(『国文学』平11・6)である。梶原は、物語の前半では「私」と夫の差異は学歴差による階級差であったが、病院で、夫と自分の性体験の相違を「私」が意識——「あの人にとつては、私が最初で無かつたのだ」——したところから、ジェンダーと不可分になっていくと述べる。

梶原の指摘は明快である。確かに夫との性体験の相違を意識する場面は、「私」の語りに顕現する差異が、階級差から性差へと移ったことが明確に分かる。しかしそれ以前に性差は表出されていなかっただろうか。また階級差から性差への移行は、従来指摘されていたような、序列の再生産としか捉えられないの

だろうか。改めて考えたい。無論、本論における性とは表象としての性である。

こうした疑問をもつ訳は、語られる「女」論が「女」と名指されてはいるもののアモルファスな意味内容を有しており、かつ「女」なるものを定義する行為自体を無効にしようとする言説が見出せるからである。また、吹出物出現に始まり治癒の兆候で終わる物語のあり方を鑑みるに、そもそも「私」が「女」論を語るのは吹出物ゆえである。とするならば吹出物と「女」はどのように関わるのか。

二、吹出物という謎

「皮膚と心」は吹出物をめぐる二日間の物語である。

ぷつと、ひとつ小豆粒に似た吹出物が、左の乳房の下に見つかり、よく見ると、その吹出物のまはりにも、ぱらぱら小さい赤い吹出物が霧を噴きかけられたやうに一面に散点してゐて、けれども、そのときは、痒ゆくもなんともありませんでした。

小説の冒頭である。吹出物の出現を表す「ぷつ」は「私」の語りの糸口である。「私」に見せられた吹出物を「あの人」は念入りに調べたうえ、自ら求めた薬を手ずから塗り込み、「うつらないものかしら」と言う「私」に「気にしちやいけねえ」と

応じる。この一見仲睦まじい夫婦の描写は、唐突に、結婚のなれそめから現在の夫婦生活に対する「私」の感慨へと切り替わる。そして仲睦まじさに隠された「ぎくしゃく」した夫婦関係及びそうした関係性に対する不満の暴露に至るのだが、すぐさま「私」はその不満を「慾」「わがまま」と捉え直し、その心根ゆえに吹出物に「見舞はれ」たのだと一先ず結論を下す。しかし布団に入ると、今度は実際には感じられていなかった「痒さ」の心像が皮膚病恐怖の一環として女学校時代を背景に連想され、「神さまだつて、あんまりだ」と皮膚病を恐怖する自分に吹出物ができたことの不条理と「不思議」を吐露するに至る。刻々と悪化する吹出物に連動して、語り手「私」は物語を構築しては裂開させ、また新たな物語を構築する。この物語は、実体としての吹出物を時限に、吹出物から想起される物語が次々と連結、肥大化する構造を有しており、「私」は吹出物によって主体化する。「私」をこの物語の語り手としてあらしめるのは、吹出物なのだ。

吹出物を知覚した時から「私」は吹出物に繫縛され、そうあることによって、吹出物は生物学的な病を超えた意味を有する記号として物語に配置される。帰宅して改めて確認した吹出物が、銭湯で見つけた時よりもさらに悪化、拡大しているのを見て「そのときから、私は、いままでの私でなくなりました。自分を、人のやうな気がなくなりました」と言い、翌朝、前日よりもさらに悪化、拡大した吹出物を見て「なんだか心までも

鬼になつてしまふ氣配が感じられて、世界が、シンと静まつて、たしかにきのふまでの私で無くなりました」と、吹出物に支配される「私」が二度に渡つて示される所以である。

「私」の語りによつて現れる吹出物とは「もつと強いものを求めるいまはしい不貞」や「慾」、身に覚えのない罪の痕跡であり、実際には感じられなくとも「永久になまぬるく、悶えてゐなければならぬ」、「最もおそろしい」苦しみとされる「痒さ」を伴い来るものであり、「女の運命を逆転させ、ロマンスを歪曲」させる「天の悪意」である。強迫観念とも思える吹出物恐怖を基に、吹出物は抑圧や拒絶、排除を引き起こす記号とされる。しかしそれだけではない。

神さまだつて、あんまりだ。私の一ばん嫌ひな、嫌ひなものを、ことさらに下さつて、ほかに病氣が無いわけやなし、まるで金の小さな物をすぽんと射当てたやうに、まさしく私の最も恐怖してゐる穴に落ち込ませて、私は、しみじみ不思議に存じました。

なぜ自分は「最も恐怖してゐる穴」に落ち込まなければならなかったのか。この「不思議」は、吹出物を、問わずにはいられない謎として捉えようとする志向に他ならない。つまり吹出物は「私」を欲望させる記号でもあるのだ。ところが一方で吹出物は排除の記号でもあり、こうした逆説性を有する吹出物を

語ることで主体化する「私」のあり方が見出せる。とするならば、あれほど饒舌に吹出物を語ってきた語り手が、診察室で医者と夫が吹出物について語るのを「ぼんやり、ちがふ部屋にゐるやうな氣持」で聞く「私」を描出するのは、どのような物語構造によるのだろうか。診察室に入る直前、語り手は次のように言う。

私は、こんな吹出物して、心まで鬼になつてしまつてゐるのだな、と実状が薄ぼんやり判つて来て、私が今まで、おたふく、おたふくと言つて、すべてに自信が無い態を装つてゐたが、けれども、やはり自分の皮膚だけを、それだけは、こつそり、いとほしみ、それが唯一のプライドだったのだといふことを、いま知らされ、私の自負してゐた謙讓だの、つつましさだの、忍従だのも、案外あてにならない贗物で、内実は私も知覚、感触の一喜一憂だけで、めくらのやうに生きてゐたあはれな女だったのだと氣附いて、知覚、感觸が、どんなに鋭敏だつても、それは動物的なものなのだ、ちつとも叡智と関係ない。全く、愚鈍な、白痴でしか無いのだ、とはつきり自身を知りました。

「鬼」が吹出物の言い換えであることは見やすい。ということとは「私」が「薄ぼんやり」判ったのは、自分自身が吹出物だということである。それまで「私」は、吹出物によつて主体化

する存在でありながら、常に吹出物の被害者として振る舞ってきた。⁽²⁾ 自らの「もつと強いものを求めるいまはしい不貞」の痕跡として吹出物を意味づけながらも、夫の「弱さ」がその願望を惹起することを言い添えていたことは、被害者としての自らを主体化する志向の証左である。吹出物の被害者として振る舞うということは、自己を世界にそのように位置づけ安住させることに他ならない。ところが右に表されたのは、それとは異なる志向である。自分自身が吹出物だという認識は受容であり、排除の記号としての吹出物を無効にするとともに、被害者としての自己を無効にする。そしてこの認識によって「はつきり自身を知」ったとは、吹出物という謎に納得のいく答えが見出されたということであり、そこに、問わずにはいられない欲望の記号としての吹出物の無効化が看取しうる。

こうした記号性の消失は、吹出物が「私」を「私」たらしめ駆動する表象ではなくなったことを示唆する。このことと、診察室で医者と夫が吹出物について語るのを「ぼんやり、ちがふ部屋にゐるやうな気持」で聞く「私」の描出と、実体としての吹出物が治療によつてすぐに治まることとは無縁ではない。そして小説が、治癒を喜ぶ「私」に投げかけられた「うれしいか？」という夫の言葉に恥じらう「私」の描写で締めくくられるのもその線上に捉えられる。治癒を喜ぶとは吹出物排除を喜ぶこと、すなわち吹出物を排除の記号とする言語である。したがって喜びを客体化し「恥づかしく」思う「私」が描かれるのは、排除

の言語を無効にする物語構造の表れだからである。

このように「私」は吹出物という謎を追いかけて、その都度ある認識を得るのだが、いずれも確かな答とはならない。吹出物こそ自分自身であるとの認識も、「私」とは何かという問いを孕んでいる。吹出物は、言い足りない何かを有した記号として物語の最後まであり続けるのだ。言い足りないとは、確かな形を持たないという点において実体化しないのと同根である。しかし吹出物は、「私」の皮膚に、感覚に、物語に、確かに在ったのだ。この言い足りないさは、戦後の小説「父」(「人間」昭22・4)に描かれた「義」に通じる。「私の胸の奥の白絹」に確かに記されている判読不可能の文字、それを読むことができれば「義」を説明することができると語り手は言う。「義」とは説明不可能というあり方で説明される記号であり、その「義」ゆえに地獄のような遊びをせずにはいられない「父(私)」は、吹出物に繫縛される「私」と同質といえよう。

「私」を繫縛し支配する記号としての吹出物は権力に置き換え可能だろう。恥じらう「私」への視線の切り替えは、被支配者あるいは被害者というあり方で世界の捉え方を無効にする別の捉え方への転回である。ここに太宰文学のキーワードである「反権威」⁽³⁾が見出せる。こうした吹出物の記号性がどのように「女」と関わるのかを次章以降で述べたい。

三、「女学校出」の「女」

「私」の、女学校出を顕示する語りについては、いくつかの先行論で指摘されている。例えば皮膚病恐怖は、女学校教育が施した皮膚病に対する知識ゆえである。⁽⁴⁾ また女学校教育で特に重視されたのが裁縫⁽⁵⁾であったことを鑑みるに、「自活の道」がたつほどの洋裁技術が意味するのは、女学校時代の「私」の優秀さである。女学校出の「私」と小学校出の夫との階級差を際立たせるこうした語り方は、夫婦の関係を決定づける。「いつもあの人は、自分を卑下して、私がなんとも思つてゐないのに、学歴のことや、それから二度目だつてことや、貧相のことなど、とても気にして、こたはつてゐらつしやる様子で」と「私」は言うが、「自分を卑下」する夫は、階級上位者の言語によつて描出されるのである。⁽⁶⁾ それゆえ「私」の眼差しの中の夫が次のように語られるのは示唆的である。

「ちよつと見せなよ。」あの人の当惑したみたいなの、こもつた声が、遠くからのやうに聞えて、

「いや。」と私は身を引き、「こんなところに、グリグリができてえ。」と腋の下に両手を当てそのまま、私は手放しで、ぐしやと泣いて、たまらずああんと言が出て、みつともない二十八のおたふくが、甘えて泣いても、なんのいぢらしさが在らう、醜悪の限りとわかつてゐても、涙がどんだん

沸いて出て、それによだれも出てしまつて、私はちつともいいところが無い。

「よし。泣くな！ お医者へ連れていつてやる。」あの人の声が、いままで聞いたことないほど、強くきつぱり響きました。

吹出物を見つけた翌朝の場面である。「いままで聞いたことない」ほど「強くきつぱり」した夫の声が描出されているからには、この場面を夫婦関係の転換点と見ることに不自然はあるまい。とするならば、先に挙げた階級性および結末に示された夫婦のはのほした描写を踏まえたうえで導かれるのは、プライドの高い人間の鼻がへし折られ、それまで下位と見なされていた者に救われるという耳慣れた話型であろうか。⁽⁷⁾ 吹出物に見舞われて身も世もなく泣き崩れたうえに「よだれ」まで出てしまふという「醜悪」の演出は、プライドの高い人間に下される罰を想起させ、「私」の優位性を無化する。そしてこの場面の後、夫婦関係は親密さを増し吹出物は治癒するという極めて物語的な展開を鑑みるに、吹出物は階級性を解消させる装置としても機能している。誠に病はどんな人間にも平等である。この小説の通俗性が指摘できる。が、この物語で吹出物がそうした機能のみに収まらないことはすでに述べた通りである。そして女学校出という属性も、夫との階級差を示すだけではない。独身時代の自分について語り手は「こんな、おたふくゆゑ、縁遠くて」

と言ひ、次の様に続ける。

二十五になつて、私は覚悟をいたしました。一生、結婚できなくとも、母を助け、妹を育て、それだけを生き甲斐として、妹は、私と七つちがひの、ことし二十一になりますけれど、きれうも良いし、だんだんわがままも無くなり、いい子になりかけて来ましたから、この妹に立派な養子を迎へて、さうして私は、私としての自活の道をたてよう。それまでは、家に在つて、家計、交際、すべて私が引き受けて、この家を守らう。

右に表されたのは、「母を助け、妹を育て」ることだけを「生き甲斐」とする、修身教科書に出てくるような孝女を思わせる「覚悟」である。女学校が「婦徳ノ涵養」⁸⁾を目的としたことを鑑みれば、良妻賢母を生きられない「私」にとつてこの「覚悟」は、女学校出の鑑と言えよう。とはいへここに表された孝女は「母を助け」などといった母の補佐役にとどまるような存在ではない。なぜなら「妹に養子を迎へ」、「家計、交際、すべて私が引き受けて、この家を守らう」とは、家政の実権を握ることを意味するからだ。もとより母子家庭の女ばかりの家である。その家にあつて「養子を迎へ」る手蔓を求める交際をし、身につけた技能で金を稼ぎ、「家を守る」人間は、家長以外にない。母の補佐役どころか、父か長男の役割を担っていると言えよう。

「私」がそのような「覚悟」をしたのは「こんな、おたふくゆゑ、縁遠くて」や「女ばかりの弱い家庭」といった言葉に表されるように、美しい容貌や親の社会的地位の高さが結婚に有利に働く価値観に際して、自身が不利な立場にあることの自覚による。したがつて孝女は、そうした自分に別の価値を与える生き方だつたはずであり、「婦徳ノ涵養」を目的とする女学校教育は、「私」に自らを肯定する論理を与えたと言えよう。だからこそその語りは必然的に女学校出という属性を構造化する。そして孝女の身体を形成するのだ。

孝女として生きるとは、身持ちを堅く生きることである。「一つとして、よいところのない縁談」に対して「いくら私が、売れのこりの、おたふくだつて、あやまち一つ犯したことはなし」と「腹立しく」思うのは、女学校教育や女性の貞操を重んじる世間の価値観を血肉化した身体性の現れである。だからこそ「女が永遠に口に出して言つてはいけない」言葉は「プロステチウト」なのである。それに父権を担う「私」の役割を合わせて考えると、独身時代の「私」は、自らに価値を与える論理によつて女性性を封印した存在であつたことが指摘しうる。その「私」が、夫との縁談に対して「腹立しく」そして「侘びしく」なりながらも次のように思うのは示唆的である。

お断りする他、ないのでございますが、何せお話を持つて来られた方が、亡父の恩人で義理あるお人ですし、母も私

も、ことを荒立てないやうにお断りしなければ、と弱気に愚図愚図いたして居りますうちに、ふと私は、あの人が可哀想になつてしまひました。きつと、やさしい人にちがひない。私だつて、女学校を出たきりで、特別になんの学問もありやしない。たいへんな持参金があるわけでもない。父が死んだし、弱い家庭だ。それに、ごらんのとほりの、おたふくで、いい加減おばあさんですし、こちらこそ、なんのいいところも無い。似合ひの夫婦かも知れない。どうせ、私は不仕合せなのだ。断つて、亡父の恩人と氣まづくなるよりはと、だんだん氣持が傾いて、それにお恥かしいことには、少しは頬のほてる浮いた氣持もございました。おまへ、ほんとにいいのかねえ、とやはり心配顏の母には、それ以上、話もせず、私から直接、その亡父の恩人に、はつきりした返事をしてしまひました。

「私」が結婚を決めたのは「ふと」訪れた「可哀想」ゆゑである。この感情が「同情や憐憫で結婚するのは、間違ひ」という現在の結婚生活に対する感慨と同根であるならば、ここに表されたのは「こちらこそ、なんのいいところも無い」という言葉成形化する階級上位者の眼差しであろう。何より「どうせ、私は不仕合せ」という言葉に、この縁談を不釣り合いとする価値観が表されている。しかしここに表出されたのはそれだけだろうか。

「私」がなぜ「可哀想」に思つたのか明確に語られることはない。描出されたのは、この感情に「ふと」捉えられたただそれだけのことで、「一つとして、よいところのない縁談」を母を退けてまで進めた「私」の強引さである。「可哀想」とは相手に向かう情感であり、このときの「可哀想」は理屈を超えて「私」を突き動かすほどの情熱である。このことは、面識が無いにもかかわらず、そのときすでに夫とのエロスの関係の内に「私」があつたことを告知する。「お恥かしいことには、少しは頬のほてる浮いた氣持もございました」と告白する所以である。

四、吹出物と「女」(1)

独身時代の「私」が女性性を封印した存在であつたこと、そしてそのような「私」に「ふと」訪れた情感は、そのときすでに夫とのエロスの関係の内に「私」があつたことを示唆することとを述べた。そうして始まつた結婚生活であつたが、夫について「私」は、何かと氣が弱いことや「不要の卑下」を指摘し、それがなければ「きつと明るい家になれる」と述べる。そしてそんな不満から、この結婚を「間違ひ」とし「もつと強いものを求めるいまはしい不貞」を告白するに至るのだ。

氣の弱い夫と不貞願望の妻という図像は、家父長制社会における「夫」と「妻」のモデルを逸脱している。家長として権能を発揮するはずの夫は弱さを強調され、妻たる「私」は、家父長制社会にあつて最も抑圧の対象とされる「不貞」を抱いてい

ることを告白するからだ。しかも面識のない頃にすでに芽生えていたはずの「頬のほてる浮いた気持」は結婚生活を振り返る言語にはない。西日の当たる縁側で肌脱ぎになって夫に体を見せる場面でも、情景の際疾さとは裏腹に「静かな落ちついた気持」でいる「私」と、医者のように患部のみを見つめる夫とが描写される。このように考えると、夫の職業が「銀座の有名な化粧品店」の専属图案工であることは、制度の逸脱を示す記号として機能していると言えよう。夫の仕事内容を表す化粧品や装飾や蔓バラといった言葉は女性的な属性であり、それは夫の男性性を希薄化するからだ。この夫に対して妻たる「私」は、実家で父権を担い、女性性を封印していた。したがって語り手は可能な限り文化的性差を感じさせない夫婦の図像を描いていると言え、そうした関係性の内で不満を抱く「私」の欲求の構造が読み取れる。それゆえ次に挙げる場面は興味深い。

「からだを、みんな見せなければいけないかしら。」

「さうよ。」あの人は、とても上品に微笑んで答へました。

「お医者を、男と思つちやいけねえ。」

私は顔を赤くしました。ほんのりとうれしく思ひました。

夫の言葉は、女性である「私」が男性である医者に「からだ」を見せることの羞恥を汲み取っている。それは「私」の女性性の顕現であるとともに、相対としての夫の男性性の顕現でもある。

る。夫の言葉を聞いた「私」が顔を「赤く」し「ほんのりとうれしく」思うこの場面は、女性性を封印していた独身時代の「私」が、「ふと」おとずれた感情や「頬のほてる浮いた気持」のままに強引に縁談を進めた場面と同じ構造を有している。性差の顕現によるエロスの関係の出来である。これが「女」論を用意するのだ。

いま急に、あの人が、最初でないこと、たまらぬ程にくやしく、うらめしく、とりかへしつかない感じで、あの人の、まへの女のひとのことも、急に色濃く、胸にせまつて来て、ほんたうにはじめて、私はその女のひとを恐ろしく、憎く思ひ、これまで一度だつて、そのひとのこと思つてみたことない私の吞気さ加減が、涙の沸いて出た程に残念でございました。くるしく、これが、あの嫉妬といふものなのでせうか。もし、さうだとしたなら、嫉妬といふものは、なんといふ救ひのない狂乱、それも肉体だけの狂乱。一点美しいところもない醜怪きはめたものか。世の中には、まだまだ私の知らない、いやな地獄があつたのですね。私は、生きてゆくのが、いやになりました。

夫が初婚ではないことは、独身時代の「私」にとって「一つとして、よいところのない縁談」の要素の一つでしかなかった。しかし再びエロスの関係の内に自らを見出した「私」にそのこ

とは「まへの女のひと」を「恐ろしく、憎く」思う気持ちや「嫉妬」や「肉体だけの狂乱」として感覚される。しかも「嫉妬」というエロスの関係を意識した言葉が使用されるだけあつて、身体表現も感情表現もそれまでより強烈である。とはいえそれを「いやな地獄」とし「生きてゆくのが、いや」になったと言つてのけながらも「私」はその着地点にとどまることをしない。「あわてて」持参の小説『ボブリー夫人』を開くやいなや物語世界に没入し、そこから想起する「女」論を、吹出物を語る時と同様、次々と連結させていくのだ。そうして表された「女」とは、性に関わる「言へない秘密」という「泥沼」を「生まれつき」持っていると言われる。しかし「言へない秘密」や「泥沼」は、その始原において「女」だけの特性としては表象されていなかった。

皮膚科と、もうひとつ、とても平気で言へないやうな、いやな名前の病氣と、そのふたつの専門医だったことを、私は病院の玄関の看板で、はじめて知つたのですが、それは、あそこに腰かけてゐる若い綺麗な映画俳優みたいな男のひと、どこにも吹出物など無い様子だし、皮膚科ではなく、そのもうひとつのはうの病氣なのかも知れない、と思へば、もう皆、この待合室に、うなだれて腰かけてゐる亡者たち皆、そのはうの病氣のやうな気がして来て（中略）だんだん私は、心配になつてまゐりました。誰にも、秘密

が在る。そんな、いやな言葉を耳元に囁やかれたやうな気がして、わくわくしてまゐりました。ひよつとしたら、この吹出物も、——と考へ、一時に総毛立つ思ひで、あの人の優しさ、自信の無さも、そんなところから起つて来てゐるのではないのかしら、まさか。

受診した病院が性病科と思しき科を併設していたことによつて、待合室で待つてゐる老若男女の患者たちから「誰にも、言へない秘密が在る」という言葉が想起され、そこから「あの人の「秘密」へと向かう。この後に続く箇所では先ほど指摘した「嫉妬」を覚え、次いで『ボブリー夫人』を通して「女つて、こんなもんです。言へない秘密を持つて居ります」という思考に至る。その「言へない秘密」とは、「女の『生まれつき』であり、「女」なるものは「泥沼を、きつと一つづつ持つて居ります」と定義される。つまり「泥沼」である「言へない秘密」にもともと性差はなかったのだが、それを「女」の「生まれつき」に限定したところに「私」の「女」論の特徴はある。それゆゑ「女」と名指されてはいるものの実体は曖昧であり、こうした意味内容の曖昧な点において、確かな意味を持たない吹出物の語られ方と同質であることが指摘しうる。これ以降たたみかけるように次々と「女」なるものの定義が「泥沼」の変形として展開されていくのだが、「泥沼」の始原に性差がないため、言葉は、立脚地を持たないまま浮遊する。とはいへ次々と浮かぶ想念を

「女」に結びつけていく語りからは「女」なるものに繫縛される「私」が読み取れよう。ここにおいてもはや「不貞」は「間違つた」結婚生活を表さず、愛読書の女主人公を始め「女」なら「誰にもある」秘密として「私」の女性性を表す。その志向を支えるのが夫とのエロスの関係の内に自らがあるといふ実感なのである。

そもそもこの物語は吹出物によって始まった。縁側で吹出物を夫に見せた描写の後、あまりに唐突に「私どもの結婚いたしましたのは、ついことしの三月でございます」と結婚のなれそめが語られたことは、皮膚病と「ぎくしやく」した夫婦関係、つまり関係性の病とが接続されたことに他ならない。皮膚科と性病科を併設した病院という場で、吹出物によって主体化する「私」が「女」論を語るのは当然の帰着と言える。

「私」が結婚生活に対して抱く不満が性を巡るものであったことは先述した通りである。皮膚病に関係性の病が接続されるこの物語において皮膚は他者との接触の場としてあるのだ。

五、吹出物と「女」(2)

吹出物の記号性の変化を背景に、夫婦の関係性を象る言語が変化する。それがこの小説の語りの構造である。夫婦の関係性を象る言語の変化とは、階級性の無化から性差の顕現である。

家父長制社会にあつて男女差は序列を表すことを鑑みるならば、性差の顕現は序列の再生産のように見える。したがって「女は、

肌で生きてゐる」といった「女」論も、肌を消費される存在としての「女」と捉えるならば、そこに男性中心的視線を見出すことに不自然はない。しかしそう単純ではないところに、この小説が名作として今も読み継がれている所以があるのではないか。「単一のメッセージしか伝達できない物語は質の低い物語である(それは『プロパガンダ』にすぎない)。矛盾するメッセージを矛盾したまま、同時に伝え、読みの水準を換えるたびに、そのつど別の読み筋が見いだせるような物語は『質の高い物語』である」⁽⁹⁾のならば。

確かに語り手「私」は「女」を連発し「女」なるものを定義することで「女」である自らを主体化した。しかしそもそもその始原に性差はなかったことは述べた通りである。言うならば「女」が「生れつき」持つているという「泥沼」は、元を辿れば男女の境界とでもいうようなカオスとしてあった。「私」はそれを「女」に限定し「女」論を展開するのだが、その後診察室へ行く直前に夫に言った、これまでの自らの思考や行為すべてに対して向けられた言葉「いろんなことを考へたのよ。あたし、ばかだわ。あたし、しんから狂つてゐたの」は、「女」論も無効にしていまいだろうか。

「泥沼」の源が男女の境界であつたということは、性差が序列を意味しないと捉えうる。しかし「私」は「泥沼」を「女」なるものの特質「生まれつき」と定義する。ここから展開する「女」論のみを解釈の対象とすれば、そこに男性中心的言語を

指摘することは容易い。しかし「女」論を含むそれまでの行為全てを相対化し「ばか」「狂つてゐる」とする言説は、男性中心的言語を無効化していると捉え得る。男性中心的言語とは権力に置き換え可能であり、権力を無効化する語りの構造において吹出物と「女」は同じなのである。

「皮膚と心」は、どこかで聞いた通俗的な話型を踏襲しつつ、「陽の光」に照らされほのぼのとした結末に収斂していくプロットに、権力の無効化というハードなメッセージが精妙に織り込まれたテキストなのである。

注(1) 同時代評では、神田鶴平の「創作時評」(「新潮」昭14・12)

中「太宰治が女になつて、めんめんと語る、その語るところに真実が見出される」や、三戸武夫の「文学界」(「三田文学」昭14・12)中「心理の動きを細かく描いたもので、不安定な生理の状態から、巧みに女心を描いてゐる」等がある。

(2) 例えば吹出物ができたことに「私は、いつたいどんな悪い事をしたといふのでせう」や「どうして私をいぢめるのです」と吹出物を害悪と捉え自らをその被害者とする言語。

(3) 金京淑「太宰治の『皮膚と心』論」(「言語・地域文化研究」平18・3)は、作中「私」の「不貞」に代表される「反時局的側面」を指摘したうえで「作者は皮膚をめぐる『私』の非正常的な言動と、『おろかな、頭のわるい女』という『私』の懺悔を効率的に繰り返すことによつて、時局の諸々のテーマを相対化し、諷刺・批判していくことが可能であった」と述べ、風刺性・批判性を有する本作が検閲を逃れた構造を明

らかにした。本論では具体的な時局ではなく抽象的な権力の無効化が物語に構造化されているとする。

(4) 前掲榎原は「『私』が皮膚病の恐怖を感じることができるのは、『女学校』の『生理の時間』や『上野の科学博物館』で、顕微鏡の拡大写真や模型を見ているからなのである。つまり、女学校教育で培われた『私』の知識が伝染病を見えさせている」と指摘する。

(5) 「高等女学校規程二関スル説明(抄)」(明治二十八年三月二十日文部省)「(学制百年史 資料編)文部科学省HP http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_064.html」の「必修科ノ学科課程二関スル標準」表によると、必修十三科目中もつとも時間数が多いのが「裁縫」で、週五時間が六学年全てに課されている。

(6) 前掲渥美論ではこの点について、「あの人」のレコードや読書の「趣味のよしあしを云々できる」「私」の「辛辣な観察者としての」眼差しを指摘する。

(7) 「支那の怪談」の翻案「竹青」(「文芸」昭20・4)もその話型を踏襲している。

(8) 「大正九年七月六日に高等女学校令の改正が行われた。高等女学校は「女子に須要な高等普通教育を為すを以て目的とする」という従来の規定に「特二国民道德ノ養成ニカメ婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」を付加した。」(前掲「学制百年史」第一編第三章第三節三 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198101/hpbz198101_2_086.html)

(9) 内田樹『女は何を欲望するか?』(平20・3、角川書店)

付記——本文の引用は山内祥史編『太宰治全集』三(平元・10、筑摩書房)による。